



おくらゐの鬼



1718
4



門 18
號 1718
卷 4

心之無

第四

石白先生

石白先生庭及の雜問と法談流解

石白先生

石白

石白先生二十八年耳とりつゝ庭及の雜問と法談流解と
得真然て舒徐子曰才一葉乃湯の要八自化と隔む貴族お
親しむ交を厚むるの教ありこと云々嘗余小遠りて人乃
知る徳を嘗て忠信一如の法を密とゆゑ仏神と違へ一如
る人子思ふてハ仏神子違へらるる一とて互に子弟と法めんを
濟済とく勝あり依りあれと才一と一及び子令りてハ是
善妙も隔るあり大子灌悟と心を滅つ子弟と一は彼を
我ももたむが我を彼ももたむが直爾と日れと法子仏神
ありとてふるを悟へしむる教の葉の湯をかきて法を

乃大妻を悦ばば何そ是と為のこふ用ん平也とよもけ言片時
誰をせむ人とそまへ造物を備ふるの懐ありわがわい
礼を無き物はいまわすト取らふ為を極意するて人を
修の丈及と外するゆゆか賈の言たと願はざるは合より人を
貴むあり始るも合ふお悪なるをば好まぬ修り修り
山くざらあへん此天下に善人か少くも善人か多しとよハ
かく下しひまの一人重の玉に珠の養子も撮る一をまうこま
ひの位に輝出が珠も取らるゆゆをさる物なきかかぬあは
計多ある洗授し汝ハそいふ為の計多わすトよと取て海なる
あり吾らとの解上よと取と論するお子そ為をそと捨は
汝が養子といふもハ皆下子の養あり美海なる子とらんや又

汝ハ合と相と貴むゆゆ子流る貴と論をまはるの人をと貴か
子法法合と願るも茶の及子かきゆゆ為をそと子人を弱小を
才とよとあんで後金をと弱らんや孔子曰汝ハその羊と愛を我
その及よと愛をとらた遠くともまけ言く人のあふ遠く不
合あれ人々を貴で合際お悪小をそハ死貨物子そとハハ
慮るも巡りて又人の子あり去中一埋るおあつぎふあり
合限を子とんをいさるをいさるれば及て死貨物ありお悪小を
ひも限を知るぞ為帯子とる及をを欲ハトよこん子とるを
とる一是も捨るこ一始より上よハか一トよの中よりとよハ
いづるこは者か上よ子あふも知れぬわわよありとそ思む
慮るも取ら子吾ハ為をそとよ捨るあり此為の及よ

遊着来と西復服て果能りり先とんく中華幣の中
より白旗よ詩を書て押さる

石臼先生古八介 擲音礎石崇紛々
芝神明茶問殊屋 更識萬人萬物君

是とんく又日本幣の中よりも同じ旗を押さるや
旗の歌よ曰

ふらまをよむき如されてたわらき

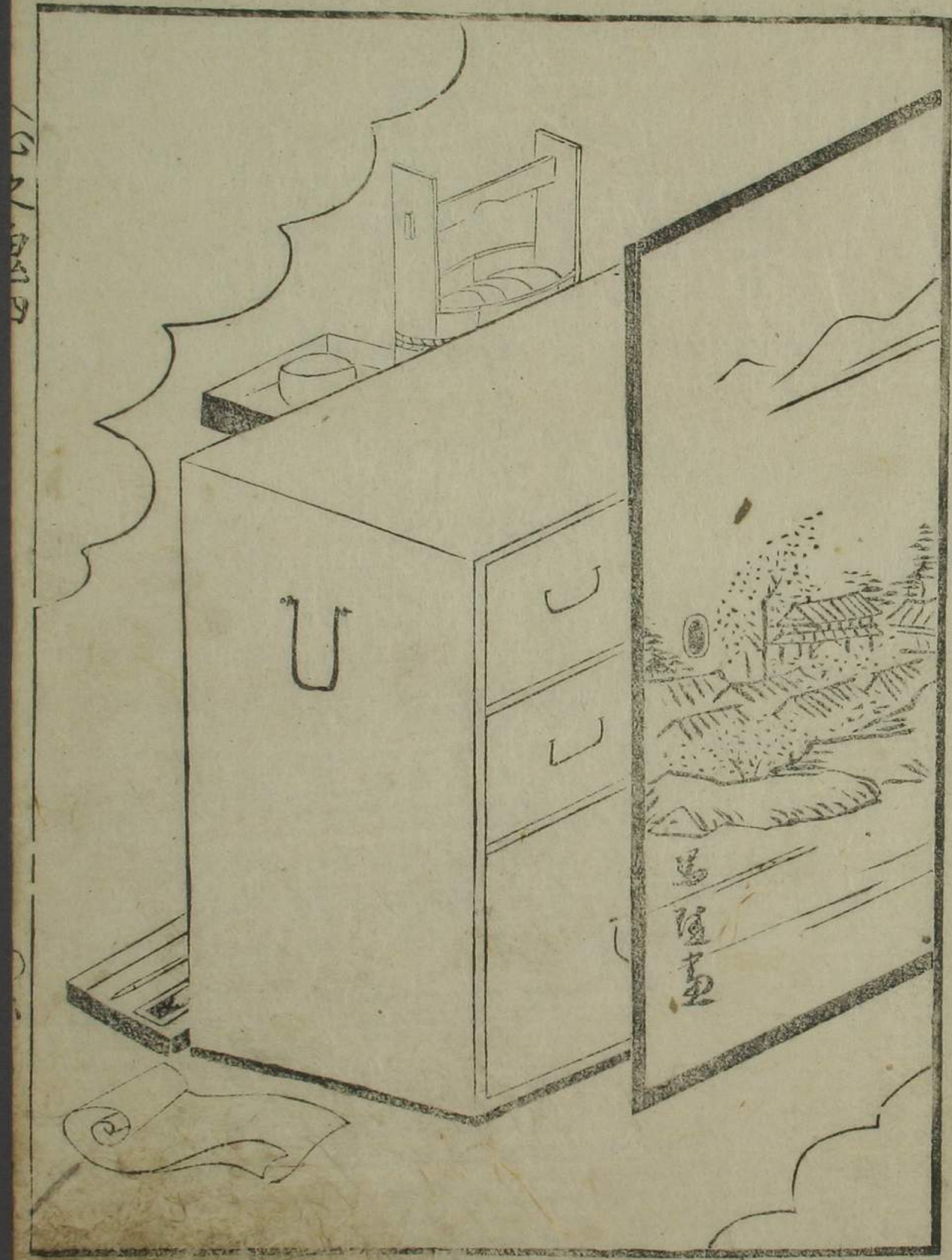
こほけく遊一先あり

用されく園子とんく一先あり

今又恥をうたれりちたて

是とんく美玉乃人ちよとちる笑ひ唯々人る

是物の上とありと悦旁て刀くられ美物方也をまひ
魚ハ味を吹そハ音と納る美も悦物と解きりり妙も子
脚猪の度光とつ向あんぞの猪武者と名を呼らる者ども
つよ今今と不冷炭汁海下ても理密うてハ編む吾を
鼻柱の儂人果人ちぶとを懸僵一とんくそとれんとよ
是とつて復虫の中より梶系とつよ美石を垢る蜘蛛乃
一黨控器とつ小冊さるると心を公せ菓をんとよる処に
女教り中より小角豆乃口印 糸総沈月とつ小名る子
系く系陳後陳を浄ひらる物か子系系路の中よりも
半分石子化とつ一樟楠とつる智ある者あり美物とほ
て曰苟思ふちにも老石石白が舌はさるる後駒し蹴たうり



付たは藤田又八景草屏斗千斛徒乃汁思と懐子哀筆巻の玉
て押多の清徹より乃藤武有小志潭の玉子曲尺梅の玉次子塚
を布水塵清布野子八流の小路織履とえりて加賀越前越後
常列奥列丹後越前越後梅の面々控儀野子八志被音秀吉琴
緒き傍期日香の玉子八鞠の一黨道心園中との味縁の一黨は兼乃
少々金子の十兩同縁乃子八井守書大長上田松原の一旗能藩乃
小八次院長格文乃子八文学の政海活布系政を乃子八簪河之布
松若丸松原附小八伽羅上野と和家財の雜具を乃子八屋根小八
屋の尼に床小八夢代犯好の之布屏風之具と楯とあり令乃政
義新満の室に湯桶入乃位互の國小八泡下の之布去純の次弟実平
強いの玉子八竹細子の一黨舎津小八壱物の一旗津戸小八磁蓋執海八

棧器入門通り小八金藏の長依系越く進歩は混雜子齒合茶灌
烟結八四と歌を吸物椀八尺と懼まは椀笥と匙或も持と濃飯
豆沢町の襟屑派浪所の派浪屑も床を振く僅中れ八葉碗片屋
の柳の下より割とくと進歩の樟楠をこを脱て勇如美物形勢必
は勢と揺八人乃那摩の隊系せざん然も謀計を妻合の内に
あつとせむこの節乃及とつり能く飯を建履と小枝を
振之之匣をよと孔明が八陳子おひ美物と八万ノ子子川分八船
海水子浮車八障をとり大木ども之并て親礼杖送本と至り
戸障子襖八楠とあり花乃鼻八花小拍子縁われが言親物力乃
烈とありお拍八及小縁あり歎の劇とたる初午六月の幟とる
家々乃籠標子子雜小瓦子翩翩白雪閃動天も儼雜子谷の



同二首乃新あり

真裸大明神 寒中負弊貧
云儀我慢彊 安穴夢中人

「點心さくみりるのね裸虫」

己かお猶ど葉を露沸るる也

「在乃中乃食ひ刺しの親玉ハ」

け人る乃たごごいーっ々々

是と深く人ら泳修るる道は必最後迄激僕迄蛇壺乃人々
威名の國風として夜来み終りぬるを裸て生れ裸て吾者
どもあれを裸を恥も何れを化ぶの人る是成るるものぞん物や
更原る食物するものぞも裸は来はれぬれぬ衣く先陳作り

茶坊どとと公致一喰物とをくー 丹坊及びひる乃具とを茶坊
さん武具とどいもよ入るるも我も高教と一時も青黄急津系
させん氣を隨て一めあるとけ人く子凍らしえ朱羅と世と後
深茶坊の黒人赤玉の角瓶赤玉の蹴火并湯屋の大棧野人坊
おの付き子御せんを何の氣を脱さんと皆先陳と進るけ
響子知るれ今何と怪一人らども早坂の草の氣が白濁
ゆらら如く皆裸とてとと振え見守りか後子に後を祀法
子騒ぐ副え氣氣流壺して之向ひ園を初とを揚りりり
茶坊もあつと今や世中の中を馳走は種証流法一夜子録音と
初捲一八世史の雷つ度子居於市立一如く今や日月も地を墮
押油碎て又（飛うと兎）一南坊道少親くくして觀も合を

嗚呼あゝ嗚呼あゝまゝまゝやや弥いぢ勒くわ蒂ていのの生な世よ子こ八はつ條じょう経けいととみみるるももと
 樂らくくててわわららりりししよよ世よ界かいのの夢ゆめ令たまももりり小こささららりりととなな来きた泥ぬ乃の
 海うみよよ之之ゆゆ海うみ波なみ乃の根ね之之のの亦またあありりとと惜あは如れ我われ令たまやや名な妙めう惜し乃の
 世よ界かいややとと生いららるる心こころ地ぢももささららりりりり



心之鬼第四終

